慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カロリン・フォツクス女史とジョン・スチュアート・ミル（四、完）
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.6 (1923. 6) ,p.932(110)- 945(123)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230601-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カロリン・フォックス女史とジョン・スチュアート・ミル（四・完）

榎本鑛治

十一

前號迄に紹介した通り、一八四〇年に於けるCaroline Fox女史の日記には、John Stuart Millに關する記述も非常に多かつたが、一八四一年以後に於ける日記には極めて少ないのである。

先づ一八四一年より見るに、五月六日附の日記までは、全然Millに關說した所がない。此日Falmouthの知事が、Fox女史等と乘馬散策を試みた。其際知事は、Millに就て曰く、「Millは、常に水力を應用し得る風車のやうである」と。女史に從へば是れは、概ねMillの早期に於ける教育に基づくものであるが、其教育は、心意的統制を目的としたのであると。（Memories of Old Friends, edited by Horace N. Pym, pp. 123-124.）

一八四一年の日記に於てMillに關する所は、是れ丈けである。飛んで一八四二年一月十日附の日記に依れば、John SterlingがFox女史を訪れて、彼は牛津大學教授E. B. Pusey博士の教說、所謂Puseyismに關するJ. S. Millの書翰で心情が溢れる許りであると告げた。Millの書翰は、CarlyleのDiderot論と同じく、冷靜なる哲學的寬容の精神を以つて記されてある。Millは、其說を見るに、英國々教遵奉（Church-of-Englandism）の鞏固なる主張を以つてするので、又頗る興味ある研究主題であると（ibid., p. 149）

又暫らくMillに關する記述が見當らない。

四月七日附の日記には、左の如く記してある。

「Barclay（女史の兄）の書翰に於てMillは、最も熱心なる語調を以て、Barclayの近世英國詩人論を記してある。即ち若し夫れが、Millの知らざる一青年に依て論述されたものであるならば、Millは、其青年が正道を歩み、さうして遙かに進んだものであると謂はざるを得ないと。Millの論理學（A System of Logic）は、此十二月頃に公刊されると云ふ。」（ibid., p. 153）

其後幾何もなく女史は、倫敦へ赴いた。五月十七日附の日記から、倫敦と記されてある。而して女史が、J. S. Millに會見したのは、此月の卅一日である。此日Fox女史は、Mill一家の人々と食事を共にしたが、云はゞ二年に一度の大歡喜（a biennial jubilee）であつて、深奥な問題を論ずるには餘りに幸福であると叙して居る。先づ第一にMillは、他のために正しい事も、彼のためには必ずしも正しくないと發見した時に、彼の經驗した筆紙に盡し難き底の變化と發達とを說明した。次に人生の中には、數多の諧謔もあるが、人生其物は、決して諧謔より成ると許りは云へないと話した。是に於て話題は轉じて、MillのGoetheヽヽヽ

Mill は、既に其「論理學體系」を書き上げたので、大變樂々して居た。彼は、目下 Fox 女史のために其中の主要なる文句に感嘆符(!)を附ける積りで居ると、女史に告げたとか。又 Mill は次の如く話したと云ふ。――「私の家族は、私が如何に偉い人物であるか全然知らない」と。彼は今日迄休暇を繰延べて、第三回の伊太利旅行に充てる積りであるとも告げた。元來彼は、冬季に病氣をし勝ちであつたが、併し夫れを增進させなかつたのは事實である。

因に此點は、Alexander Bain の「ミル評論」を參照すると首肯し得る所がある。即ち一八三九年一月十七日附の J. S. Mill の弟 Henry の書翰に依れば「John の健康は、さう大したことではあるまいと思ふ。勿論私達が John の顏色や、Arnott 醫師の話より判斷したに過ぎない。併し Mill が伊太利へ赴くことになつたのも、彼の胸痛のためであつて、多分伊太利に於ける一冬は、John の全生涯に取て直接的且永久的の利益を與へるであらうと思はれる。……或は是れが痛風になるかも知れないと云ふ話である。」(A. Bain; J. S. Mill, a criticism, pp. 44-45) 兎に角以上の引用に依るも、冬季は、Mill の健康上殊に避く可きであつたものと察せられる。

再び Fox 女史の日記に立戻るに、Mill は死刑の保存に就ては、Wordsworth に贊同する氣配があるけれど、幸ひにも未だ其決心にまでは至らなかつたと云ふ。最後に Mill の Carlyle論がある。即ち左の如し。

「Carlyle は、純正哲學者以外の階級には寛大であると考へる。併し彼の思考方法の偏狹なるがために、現在 Carlyle は、Sterling との議論に失敗して居る。又 Carlyle は、其著『佛蘭西革命史』に於ても、餘り成功して居るとは云へない。即ち其書に依て彼が、永久的權威たることは至難である。次に革命思想の型態も、現代が同情し得るには餘りに隔りがある。彼の總ての努力は、明白に直接的成果を左右する、高貴の抽象的原理ではなかつた。――要するに彼の打建てた原理は、一時的の影響に過ぎない。John Mill も、嘗て佛蘭西革命史を執筆する計畫を抱いたが偶々友人の Carlyle の志圖を聞いたので、Mill は彼の參考書を Carlyle に讓渡した。更に Mill は、希臘史の著述を思立つたが、是れも Connop Thirlwall の先んずる所となつた」と。(ibid., p. 157)

因に Thirlwall の「希臘史」(History of Greece) は、一八三五年乃至一八四七年に刊行され、Lardner's Cyclopaedia の中に收めらる。其後一八四七年乃至一八五二年に亘て改訂された。(Chambers's Biographical Dictionary, p. 913)

飛んで六月六日 Fox 女史は、Carlyle を訪問して、種々物語つた末、J. S. Mill に言及した。Carlyle の Mill 評に曰く、「嗚呼憐む可き徒輩よ。彼はベンサム主義より脫出しなければならなかつた。彼が味つた總ての情緒と苦痛とは、彼をして Bentham が夢にだも考へなかつた思想に至らせるに役立つた。而も尙ほ彼は、未だに餘りに一切を論證することを欲して居る。若し Mill が天國に昇るとしたならば、彼は恐らく總ての事物が其處に存在する所以を發見する迄は滿足しまい。私に於ては、天國の構造などは何うでもよい。其處には天使等の職工團體があるか、若くは勞働者階級があるかなどの問題の如き――私は悉く是等を拋擲しやうと欲する」と。(ibid., pp. 161-162) 其他此日の日記には、Carlyle の宗教論、Goethe 論、Wordsworth 論等があ

るも、今は省略する。

次に六月十日附の日記には、數年前 J. Mill が蘇格蘭に在りし Carlyle へ種々の書物を送つた所、殊に "Arthur Conings by" が Carlyle の興味を惹き、遂に其著者をすら覺えさせたが、Carlyle と John Sterling との交際は此處に始まつたと云ふ Mill の話が載せてある丈けである。(ibid., p. 164)

續いて六月十六日附の日記に依れば、此の日 Fox 女史は、かの Temple Bar に於て最近伊太利より歸朝した John Sterling に會したので、兩人は連立つて、"Guidone", "Athelwold", "Thorndale", "Granvenhurst", 等の著者たる William Smith を訪問した。夫れより Smith の案内にて、Jerusalem の聖堂を模倣した古風な御堂武士の會堂(the Church of the Templars)を見物する中に、一行は John Mill 兄弟に邂逅した。一同は諸々方々を巡廻しながら、伊太利の思想に就て物語つた。Sterling の確信する所は、結局 Antonio Allegri da Correggio が眞の畫家であると謂ふのに在る。即ち獨り Correggio のみが、不可能なことを成就したのであつて、他の輩は何れも、多少有望な試圖を企てたのに外ならないからである。Sterling は曰く、

「Raphael は、諸君が悟性に移し取ること の出來るものである。併し純粹なる感情の其美泉に於て新たに汲み出すためには、諸君は常に Correggio に立ち歸らなければならない」と。

茲に於て Mill は、物靜かに語るやう、「今 Sterling の云つたことに依て、私の見解は非常に確證される。嘗て私も、Correggio に就ては同樣の確證を持つて居た」と。一同は彼方此方と見物しながら、或は往時の武士道を想ひ出し、或は宗教的信仰を論じて別れた。最後に Mill は、Fox 女史に向つて彼の「論理學體系」が目下印刷中である由を語つたが、特に彼は、其書が興味あるものとしてよりも、寧ろ知識に依てのみ理解し得るものであると注意した。即ち彼は、彼の指定する以外の章句を決して讀む可らずと女史に豫告したのである。Mill は其理由を說明して曰く、「貴女は Cornwall に居住するので、鑛山に關する書物を讀む位の氣組になるかも知れないし、又所謂友情を荷厄介にするかも知れないからである」と。(ibid., pp. 165-166)

右の日記を以て Fox 女史が倫敦滯在中 Mill に關して叙述した所は終りである。併し此年即ち一八四二年女史が倫敦滯在の期間は、凡そ二ヶ月に及び、七月十二日附の日記より Falmouth にて認めてある。以下此年には十二月二十二日を除いて、Mill に關する記述が一日も見當らない。即ち十二月二十二日附の日記には、John Mill より女史の兄 Robert Barclay に宛た手紙の要點が記してある。之に依れば、個人的再生(regeneration)は社會の進歩に先んじなければならぬと、Mill は確信するに至り、而して他人の勞作に確實性定限性を與へるために、彼のなし得る最善の仕事は唯だ彼の「論理學體系」を完成するに在るのみと、何時しか彼は覺るやうになつたと云ふ。(ibid., p. 174)

十二

續いて一八四三年の日記を見ると、三月九日に始めて左の如く Mill に關說した所がある。此日 John Sterling が Fox 女史を訪ねたものと察せられる。即ち

「J. S. Mill の『論理學體系』が昨八日に屆いた。私は、自由と必然に關する章 (of Liberty and Necessity) ——即ち第四編『精神科學の論理に就て』(on the Logic of the Moral Sciences)

の第二章――を讀んだ、John Sterling は、彼が Mill の心情中に認めた所の漸次的發展に就て話した。即ち現在の Mill は、眞理てう軍隊の一兵卒たる至高の光榮のために、有力なる一團體に於ける萬人衆知の首領たる地位を犧牲に供し、而して假令最近に於ける彼の門下が如何程辯護するにしても、兎に角 Mill は、虛僞の强大なる占據地を悉皆奪取せんずと準備して居るのである。從來 Mill は、政治學と社會制度とが萬事である（Politics and Social Institutions are everything）と云ふ信仰に養はれて居たが、次第に此外界的存在より解放されるに至り、而して今や明かに、個人的改善が社會進歩の基礎であらねばならぬと云ふことを感じて居るのである。（以上は、專ら Mill が所謂ペンサム主義より脱却したことを指すのである。）Sterling の考へに依れば、Mill の『論理學體系』は或者を誘ふて、彼等が彼等自身の意識に於て毫も答へられない所の、人間性に於ける或種の要素、例へば敬虔の如きものゝ存在することを信じさせるのであると云ふ」と。（op. cit., p. 179）

次に三月二十四日附の日記を見るに、此日 J. Sterling が Fox 女史を訪れて、彼が倫敦滯在中知れる友人に就て話した。其中に於て彼は、John Frederick Denison Maurice に關說し、更に J. S. Mill に論及して居る。即ち Maurice に依れば、Mill の著書の缺點は、唯だ諸命題の論理學（a Logic of Propositions）を試みたに過ぎない、從て實體論者（Ontologists）に對して諸觀念のより高き論理學（the higher Logic of Ideas）を殘してあることになると云ふ。併し是れは公平なる批判なりと。Sterling の思考せざる所である。何故と云ふに偉大なる多數の實體論者は、一人も、斯る論理學の最小なる概案すら、今迄に吾々に與へなかつたからである。但し Hegel の著書は、此目的に差向けられないでもない云々。（ibid., p. 179）

是れより暫らく女史の日記には、Mill に關說した所がない。飛んで十月三十日附の日記を見るに、此日は倫敦と認めてあるから、既に此兩三日前に倫敦へ出掛けたのに相違ない。併し原本に十月二十四日乃至二十九日の日記が省略されてある故、女史の倫敦訪問は何日であつたか知る由がない。此日 Fox 女史は、John Sterling 及び John Mill の妹 Harriet と共に、Owen 教授を訪問して、種々の問題を論じたが、J. S. Mill に關する所がないから茲には省略する。兎に角今度の倫敦訪問に於て Mill, Fox 兩氏の對談のありしや否や、全然不明である。（ibid., p. 185）

右が、一八四三年に於ける Fox 女史の日記に現はれた所である。翌一八四四年の日記を見るに、五月二十五日女史は倫敦を訪問したのである。此日 Strand に於て女史は、John Mill に出遭つた。兩人は暫らく、National Gallery にある伊太利の畫家 Francesco Raibolini の作品や、Dulwich Gallery にある伊太利の畫家 Guido Reni の作品等に就て面白く立話をした。Mill は、前者即ち Francesco に就て彼の生硬無生氣なる流儀を寬恕し得ず、又後者即ち Guido に就て Sterling の批評を不當とすると云つた。併し同じく伊太利の畫家 Carlo Dolci の作品に就ては、Mill は Sterling の見解に全然贊同するのであると云ふ。（ibid., p. 189）

斯く一八四四年の日記を繰るに、Mill に關する所は、僅かに右の五月二十五日一日丈けである。更に翌一八四五年に於ては、Mill に關することは、一言半句も見當らない。翌々一八四六年の日記に入るに、此年五月十七日 Fox 女史

は、倫敦に赴いた。是れは、Samuel Laurence に肖像を描いて貰ふためであつた。

Laurence と別れて、歸途女史は Mill 家を訪れて非常に歡待された。John Mill は、女史が自制の精神に於て彼等を訪問せられんことを吳々も希望して居たとの話である。(ibid., p. 205)

因に此日 Laurence の描ける Fox 女史の肖像は、Merkomer が蝕刻して、女史遺稿の原本の卷頭に掲げられてある。扨て飛んで五月二十九日女史は再び Mill 家を訪れた。John Mill は、物理學者 James David Forbes の氷河に關する著書を示して、頗る熱心に氷河の運動に就て細說した。Mill は、或會合に於て知己となれる今は亡き Joseph Blanco White を指して、有力家には非ざるも、云はゞ病的に良心を守る底の人物に思はれたと語つた。White を知る者は皆、彼を温和と思出さゞるを得なかつた。White の全性質は、夫れ程に温順であり、又深切であつた。Cromwell に關する Mill の意見は、常に必ずしも Carlyle と同じではない。Carlyle は常に、Cromwell が正當なりと證明するに努めて居る。Carlyle は、かの一六四九年頃に於ける愛蘭の虐殺に正當の理由ありと主張することが出來なかつた。勿論 Carlyle と雖も、Cromwell が軍紀上已むを得ず行つたことにして、若しさうでなければ Cromwell をてなさなかつたであらうと云ふことを充分信じて居たのである。即ち Mill の曰く「Carlyle は今日迄殆んど社會に立入らないのである。何故と云ふに彼は、社會に於ける福利を知らず、又社會を離れて事をなすが故である」と。(ibid., pp. 206-207)

右を以て一先づ、Fox 女史の倫敦滯在中の日記に於て、Mill に關說する所は終る。此年六、七の二ヶ月に亘て女史が瑞西方面へ旅行したことは、既に述べた所であるが（本誌三月號拙稿九七――九八頁參照）、八月十二日附の日記は再び女史が倫敦に滯在せる由を告げて居る。併し再度の倫敦滯在中女史は、Mill と會見したるや否や一向不明である。女史は倫敦に滯在すること凡そ半月にして、九月匆々 Falmouth に立戻つた。而して當時其地に在りし Lloyd 博士に屢々會見した。

九月二十二日の日記に依れば Lloyd 博士は、Fox 女史を訪問したのである。博士は、Mill の「論理學體系」を Dublin 大學に於て當時講述紹介した人である。Lloyd 博士に從へば Mill は、他の何人よりも多く、F. Bacon と同等なる價値を有すると共に、演繹法の部門に不足する所があることを示して居ると云ふ。即ち Bacon は常に溯つて、總ての理由を諸事實に求めたのである。Lloyd 博士は自由意志(Free-will) に關する Mill の記述に頗る興味を覺えて、或人が疑ふ所の自由意志に於ける弊害を吟味しないが、併し世の中には精神的世界並に物質的世界を支配する一定の法則があると云ふことを以て、一事實の單純なる叙述と考へたのである。(ibid., pp. 210-211)

此日 Lloyd 博士が Mill に關して語つた所は右に盡ると共に、一八四六年の日記中に Fox 女史が Mill に關說した所も亦終る。然らば翌一八四七年は如何と云ふに、女史は五月匆々倫敦を訪問したのであるが、一度も Mill に會見しなかつたらしい。從て Mill に關する記述は全然ない。僅かに五月二十日 Carlyle 夫人を訪れた際の談話中に、米國の詩人 Ralph Waldo Emerson が一八三三年 John Stuart Mill の紹介狀を携へて、遙々 Carlyle を蘇格蘭の Craigenputtock に訪ねたと云ふことを聞いたと記して

あるに過ぎない。（ibid., p. 219）其後十二月三日附の日記中に、Julius Charles Hare が John Sterling 傳執筆に非常なる困難をして居る。併し夫れは、Mill や Carlyle のために細大洩さず記すに在るのであるが、周圍の實狀より或は其公表を餘儀なくされるらしいと書いてある。（ibid., p. 227）因に Hare は、翌一八四八年 J. Sterling の傳記を附した "Remains of John Sterling" を公にした。（Chambers's Biographical Dictionary, p. 452）

續いて一八四八年の日記を見るに、二月二十三日には Clara Mill よりの書信が引用されてある。是れは、J. S. Mill が John Sterling 傳を執筆すると聞いて、Fox 女史が注意を與へたのに對する返事である。Clara は曰く「貴女（Fox 女史）の思ふ所を申して下さい。さうして貴女のなし得る總ての事をして下さい。夫れこそ、彼（John Sterling）をば榮譽あらしめるものですから」と。（ibid., pp. 228-229）一八四八年は以上の一日に留まる。

翌一八四九年の日記を見るに、女史は五月末より八月末に亘て倫敦に滯在したのであるが、遂に Mill に會見しなかつたものと察せられる。此年の日記は、原本に引用される所が比較的多いけれども、Mill に關する所は全然ない。一八五〇年乃至一八五四年の日記、亦然り。一八五五年五月七日附の日記には、Clara Mill 宛の Fox 女史の書信が引用されて居るも、其内容は前年異國の土となりし女史の兄 Robert Barclay（本誌三月號拙稿九八頁參照）に對する Clara Mill の悔みへの返事に過ぎないから、此處には省略する。（ibid., pp. 302-303）此年にも Mill に關說する所がない。以下一八五八年迄亦然り。

一八五九年十一月二十五日附の Elizabeth T. Carne 孃宛の書信に於て Fox 女史は曰く「……私は今 John Stuart Mill 氏の恐る可き著書即ち自由論（on Liberty, 1859）を讀破中ですが、夫れは非常に明瞭であり、平心であり、又冷靜であります。即ち氏は私達の上に莫大なる本分を課して、私達を充分に矛盾に陷らしめると共に、私達の最も大事にする、且最も神聖なる諸眞理の面前に常に反對者を立入らしめるのです。何故と云ふに假令夫等の眞理が眞に猛烈なる議論に耐へ得るにしても、斯の如き吟味がなければ、夫等の眞理は兎もすれば空虛となり、又無價値となり勝ちですから。氏は、運命神の如く無慈悲に、私達を看破するのです。私は一度はよく氏を知りましたし、又隨分と敎へられました。併し氏の憐心なき論法は、其時よりも遙かに進んでは居ないでせうか。此書は、極めて傷ましき敷語の中に氏の愛妻（即ち Taylor 夫人）の追憶に題寄（dedicate）せられて居ます。今や氏は、種々の意味に於て孤獨です。さうして氏は、折々其冷靜なのに戰慄せざるを得ません」と。（ibid., pp. 321-322）

又同年十二月二十三日附の E. T. Carne 孃宛の書信中に女史は、附言すらく「いゝえ、私は Mill 氏と同見ではありません。勿論私は、私の愚說の或點が兎に角修正されたことを非常に喜ばねばなりません。併し Mill 氏は私を戰慄させます。何故なら氏の遣口は餘りに鋭く、又餘りに素早いものですから。社會生活のための心意的訓練に對する氏の批評は、非常に力强いものであると思ひます。……次に Mill 氏は吾が英國に於て個性が次第〳〵に消え失せつゝあることを、非常に歎いて居ります。私達は虛僞や妥協（Falsehood or Compromise）よりも奇異（Singularity）を恐れます。さうして是れは、氏

の考へで、一國民衰退の不吉なる兆候とする所です。氏に云はせれば、佛國は此道程に於て英國よりも遙かに前進して居ります」と。(ibid., p. 322)

右を以て一八五九年の日記に於て Mill に關說する所が終ると共に、是れが Fox 女史の遺稿に於て Mill に關說した所の最後である。以下原本には、一八六〇年五月二十五日乃至一八七一年一月五日の日記が引用されてあるも、Mill に關說する文句は全然見受けない。

十三

以上の如く私は、Caroline Fox 女史の遺稿中より John Mill に言及せる所を細大洩らさず紹介した。其結果私の會得したことは、女史の筆を通じて傳へられる所が Mill の前半生、詳言すれば大體に於て「自叙傳」第六章までの縮圖であると謂ふのに在る。唯だ彼の學說を充分に窺ふことの出來ぬ丈けが遺憾である。加之、女史の遺稿は、專ら日記より成るが故に、女史の執筆するまでに談話の記憶違ひも生じたであらう。强ひて難ずれば、是等が其缺點であるとも云へる。併し其中には Mill の性格が明確に表はされて居るを以て、Sir Leslie Stephen が嘗て「Mill の自叙傳は無味乾燥である」と云ふやうな批評を下した所も、斯る記錄の出現に依て相當に色附けられることゝ思ふ。(Sir Leslie Stephen, the English Utilitarians, 1900, vol. III p. 70) 斯の如き意味に於て Fox 女史の遺稿は、單に John Stuart Mill の研究者に取てのみならず、又女史と親交ありし Thomas Carlyle や John Sterling 等の研究者に取ても貴重なものであると信ずる。

最後に私の特に氣附いたことを一二記して、本稿を結ぶことゝする。先づ屢々引用される John Stuart Mill の座右の銘「今に働けない夜が來る」(the night cometh when no man can work.) には「今日と云ふ日に働け」(work while it is called to-day.) と云ふ前置があること、其一である。(A. Bain, J. S. Mill, p. 159; Memories of Old Friends, p. 91) 其二は、Caroline Fox 女史の遺稿を通じて觀たる John Stuart Mill が、其著「經濟學不定問題論集」に於て「經濟學以外何物をも研究せざる經濟學者は、彼の學問を實際に應用しやうとしても、失敗するであらう」(J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, 2nd. edit., 1874, p. 151.) と論じた所に、ピッタリと當嵌ることと是れである。洵に Mill は、終生を通じて斯の如き言說の實行に努めたればこそ、L. L. Price の言ふ如く、十九世紀の後半に於て英國人の思想に深く且つ博き影響を及ぼすことが出來たのである。(L. L. Price, A Short History of Political Economy in England, 9th. edit., p. 87.) (完)

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（六、完）

奥井復太郎

二十

Ashmore Wingate によれば『近世畫家論』は其の關係せる方面に與へた影響の甚大なる點に於いて、其の出版の年を Contract Social. Wealth of Nations. Origin of Species. Sartor Resartus. Analogy of Christianity 並びに The first Oxford Tract 等のそれ等と同じく記憶す可き價値を持つものである（Cf. Life of John Ruskin, pp. 44-45）一八四三年と云ふ年は『經驗の少なき、併し窮りなく又遠大なる才能を有し、且つ彼等が